

英国の日本語教育における Decolonising the curriculum を考える

— 翻訳の授業を例に —

イースト・アングリア大学 戸祭哲子

1. 背景

近年、英国の各大学では、Decolonising the curriculum（「大学カリキュラムの脱植民地化」または「非植民地化」）の必要性が叫ばれ、2021年のBlack Lives Matter運動の世界的な広がりもあり、インクルーシブ教育を目指したさまざまな試みが行われている。「脱植民地化」とは、植民地主義そのものから脱すること、または植民地主義の考え方から脱することである。例えば西洋では、西欧中心主義（Eurocentrism）や帝国主義（imperialism）に基づいたものの見方や考え方を再考しようという動きがある。大学においても、白人中心の大学システムや知識・学問体系を見直し、日本人も含む非白人、つまり白人にとっての「他者」をどう尊重して理解し、教え、学んでいくか、ということが議論されている（Bhambra et al. eds. 2018, Hack 2020）。これがDecolonising the curriculumである。言語教育における脱植民地化は、主に国家政策の一つとして推進された植民地での言語教育とその後について考察するもので、特に西欧言語教育について多くの研究・議論がなされている（Lin & Martin eds. 2005, Macedo ed. 2019, Phipps 2019, 2021, IMLR 2020）。日本語教育については、主に旧植民地における日本語教育やアイヌ民族・琉球諸語使用者に対する日本語教育のあり方などについて論じられている。

では、英国での日本語教育におけるDecolonising the curriculumはどうだろうか。脱植民地化のみに着目したものではないが、他者理解・異文化相互理解という、より大きな枠組みの中で日本語教育を捉えようという潮流がある。例えば異文化理解・コミュニケーションのための言語教育（Byram 1997, 2020, Liddicoat & Scarino 2013）や、翻訳では、言語学的側面のみならず言語の社会的・文化的・歴史的・政治的側面等も研究の対象とする現在の翻訳学の動向（Munday et al. 2022）を踏まえた教育が挙げられよう。また脱植民地化の視点と関連して、翻訳学では、翻訳先の言語に対する西欧語、特に英語の優位性を問題視する議論があり（Venuti 2008）、英日・日英翻訳のあり方についてもこの文脈で再検討が必要であろう。

本稿は、他者理解・多様性を目指す日本語・翻訳教育という大きな流れの中に、英国の日本語教育におけるDecolonising the curriculumの議論を位置づけるものである。イースト・アングリア大学での翻訳の授業を例に、英国の日本語教育活動における脱植民地化を考える上で、実際に何がどう問題となり得るのかを整理し、今後の課題・展望を考察してみたい¹。

2. モジュール概要

本翻訳（英日・日英）モジュールは、日本語専攻の最終学年の学生を主な対象として開講され、例年10～15名の学生が履修している。様々なジャンルのテキストを扱いながら、翻訳の技術を学ぶだけでなく、広くは言語活動としての翻訳、異文化コミュニケーションの手段としての翻訳の意義や社会的役割を幅広く考察できるようなシラバスを作成している。そのため翻訳練習では訳に注釈を付け、翻訳時に難しいと思った点や言語以外で調べたり考えたりしたことも記録してもらうようにしている。

2019年に、このモジュールで、野菜の色の起源を説く日本の昔話（由来譚・由来話）の絵本の英訳を試みた。昔話のため多くのバージョンがあるが、松谷みよ子作『にんじんさんがあかいわけ』（ひらやまえいぞう絵、童心社、1989年）を使用した。この絵本では、おばあちゃんが子供に昔話を語るような言葉が使われている。そもそもこの絵本を選んだ理由は、野菜が歩く音などのオノマトペの翻訳

練習と、複数の話者（語り手と登場人物）の語りを翻訳仕分ける練習をするためであった。しかし学生の一人が野菜の色の英訳を問題視し、当時それについて授業で議論しなかったものの、この解釈についてどう対応すべきか課題が残った。その後 2020 年に *Decolonising the curriculum* が大学の重点目標となり、学生と教職員を交えたワークショップなどが盛んに行われ、大学で何をどう *decolonise* すべきかが議論された。そして、学生がこの絵本をどう理解するか記録し考察することは、翻訳を含めた日本語教育における *Decolonising the curriculum* を検討する例になるかもしれないと考え、2021 年の春学期に再度この絵本の翻訳を課題とすることにした。

計 12 週ある学期中（週一コマ 2 時間、コロナ禍のため全てオンライン授業）、第 2 週に俳句と短歌を例に日本語におけるオノマトペの多用と人称代名詞の欠如について学び、オノマトペと話者の訳出練習としてこの絵本の英訳・注釈を宿題とした。第 4 週に宿題提出、第 5 週の授業で学生の翻訳についてフィードバックと意見交換をした。モジュールの登録学生は 11 名、うち英国人が 8 名、英国以外の欧州人が 3 名。この中で、課題・宿題・フィードバックの本研究への使用を同意してくれた 8 名（英国人 5 名、英国以外の欧州人 3 名）を本考察の対象とする²。

3. テキストと翻訳例

絵本のあらすじは以下のとおり。野菜畑のにんじん、だいこん、ごぼうが一緒にお風呂に行った。最初にごぼうが熱いお風呂に入ったが、すぐにとび出してしまったので「あれあれ まだ まっくろけ・・・」、次に、にんじんはじつとがまんしてお湯につかったので「まっかっかになってねえ」、そしてだいこんはよく体を洗ったので、「それで だいこんさんは まっしろなのよ」。結びは、「ね おだいどころへ いってごらん ほんとでしょ とっぴんぱらりのふう」（引用はすべて松谷 1989 より）。

以下は宿題を提出した 5 名の訳である。スペルや表記は間違いも含めそのままにしてある。

ごぼう「あれあれ まだ まっくろけ・・・」

“what?” “Why is it so dark?”

Oh no! Why am I still dirty?

“Huh, I'm still dark brown!”

Oh dear, Burdock is still all dirty...

I'm still covered in soil...

にんじん「まっかっかになってねえ」

She has turned bright orange!

He had turned bright orange!

they had turned bright, bright red!

he was bright red!

he had turned bright red.

だいこん「それで だいこんさんは まっしろなのよ」

Wow! He is so clean!

And so, Mr Radish was sparkling clean!

Radish became white and sparkling-clean!

Daikon was completely white!

That's why daikon radishes are so white.

上記すべての学生が、ごぼうが「まっくろけ」であるという部分に「black」を使わなかった。代わりに「dirty」、「dark brown」、「covered in soil」などと訳されている。にんじんの色は「red」または「orange」で、「あか」をどう訳すべきかが興味深い。だいこんの色には「white」と「clean」が使われている。

4. 学生との意見交換

この野菜の色の英訳について後の授業で学生と意見交換した。以下は 10 分程度の対話の概要である。Tは教員（筆者）、Sは学生を示す³。

T. 皆が「まっくろけ」を「black」ではなく他の言葉で訳した。理由は何か。

S1. ごぼうを「dirty and brown」、だいこんを「clean and white」と訳するのは人種差別だと思ふ。これをほめかすことも大問題だ。ごぼうは茶色なので「brown」だけでいい。人種差別はだめだ。

S2. 賛成。

T. 誰かの注釈で、これはお風呂の入り方を学ぶための教育的な本なので、きたないのが黒できれいなのが白なのは間違っている、とあった⁴。教育的な本とすれば問題だろう。しかし、教育的な本ではなく、野菜の色の違いについての昔話と考えればどうか。本の目的が異なる場合はどうか。... 他にも例があると思うが、例えば日本での『ちびくろサンボ』 (*The Story of Little Black Sambo*) をめぐる出版状況を聞いたことがあるか。子どもに人気の本だが一時絶版になり、新訳も出た。また『ドリトル先生』 (*The Story of Doctor Dolittle*) の初版を読んだことがあるか。人種差別的な表現が含まれているが。

S (all). (chat 書き込みで) 知らない。読んだことがない。

T. 興味のある人はぜひ調べるといいだろう。翻訳者は原文の差別的な表現をどう理解し現代社会にふさわしい翻訳をしたらいいか考えなければならないだろう。

S1. 今ここにいる学生のほとんどは白人で人種差別の対象ではなく、差別を日常的に体験していない。人種に関する内容が含まれるものを翻訳する場合、黒人の作家や翻訳家を起用し、黒人の声を正しく聞けるような翻訳になるとよい。人種差別の被害者ではない白人が白人の視点から訳すより望ましいのではないか。

S3. しかし黒人作家が白人の翻訳者に訳を頼んだ例があった。周りの人々はこの作家が黒人翻訳者を選ばなかったことに慌てたようだが、本人が選んだのだから、それは厳しい見方だろう。S1にも同意するが、黒人作家自身が、多様な視点を理解し信頼できる白人翻訳者に翻訳を頼む場合もある。

S4. 今は白人が翻訳しても、かつての植民地時代と同じような価値観は見られないだろう。もちろんより多くの黒人翻訳者が必要だと言えるだろうが、現実的になるべきだ。時代が違うので、人々はあからさまに人種差別的にはならないだろうし、みんなこうした問題を日々学んでいる。生きてる時代が違う。何を受け入れることができ、何がだめなのか、みんな常に学んでいる。人種問題や文化表象という点で、適切な翻訳とは何かを。だから、どちらが正しいというわけではなくバランスが大事だ。

T. これはとても重要な議論だ。この問題は、翻訳や異文化コミュニケーションにおいては、知らないではすまされないことかもしれない。これに関連して、次に翻訳工程におけるレビューについて考えてみよう。

このように、野菜の色の英訳にみられる人種差別的表現の問題から、現代の翻訳者に期待される視座にまで話が発展した。そしてこの後、翻訳工程で差別表現などの問題箇所を確認する役割があるチームワークとレビューの重要性を学んだ。フォーマティブ・アセスメントは翻訳者とレビューアーが組になって日本語原文を英訳・校正し、発表、意見交換する場とした。

5. 考察

このような学生の翻訳と見解をどう理解すればよいか。学生との意見交換後、本翻訳課題をめぐる諸問題についてさらに調査、研究、考察した。それらを以下にまとめる。

5.1 言語教育

言語教育という視点から考えると、本翻訳課題を通して言語と言語の背景・歴史・文化が学べ、以下

のような言語習得と内容取得が期待できるだろう。

まず、言語学的に見ると、「まっくろけ」、「まっかっか」、「まっしろ」といった言葉を「くろ」、「あか」、「しろ」と区別して学ぶことができる。また、物語りは読書体験と違って耳で聞くため、「まっくろけ」のような強調された音や印象深い言葉が使われることが多い。この絵本ではオノマトペも多用されており、聞き手が耳で楽しめるし、日本語の音の豊かさも学べるだろう⁵。

内容取得という点からも様々なことが学べる。民話・昔話は日本の伝統文化の一部であり、この絵本は、日本の豊かな口承文化の伝統を受け継ぐものである。特にこの話は昔話として広く知られているため、日本人が共有する文化を学ぶ手助けとなろう。また、日本でよく食べられている野菜の種類や、赤・白・黒といった日本の色の伝統的な表象を学ぶこともできる⁶。さらに絵本は児童文学であるため、日本の昔話の教育的役割について議論することもできるだろう。

この絵本の翻訳を、英国の日本語専攻の大学生が日本語・日本文化理解を目指して取り組む課題として捉えるならば、原文を深く理解し尊重して訳したほうが好ましいと考えられよう。わずか三語ではあるが、野菜の色を色として翻訳しないことで、この昔話に含まれる上記のような言語学的特徴や文化的背景が失われ、日本語・日本文化が訳文の聞き手または読者に十分に伝わらない可能性があるからである。

5.2 翻訳学

では、翻訳学の観点から考えるとどうだろうか。翻訳学では、原文と訳文を一致させるという言語学的視点だけでなく、「他者」をどう訳すか、という文化的問題が大きなテーマの一つとなっている (Bassnett & Trivedi 1999, Marinetti 2011)。この議論の中心概念として、異化 (foreignisation、原文に見られる異文化を尊重して訳す) と同化 (domestication、訳文の読者の文化に合わせて訳す) がある。この絵本の翻訳は英国人読者を想定して訳す課題としたため、英国で人種差別につながるような表現が原文にあるならば、学生が同化を選択したことは十分に理解できよう。

しかし、これを脱植民地化の視点から見てみよう。異化・同化論を発展させた米国の翻訳者・研究者ローレンス・ヴェヌティは、同化は他言語から英語に訳される場合に適用されることが多く、これを自民族中心主義の表れであるとし批判した (Venuti 2008)。英語のような優位な文化の権力のある言語に訳す場合は、その文化に合わせて翻訳されることが多いというのである。逆に、英語から日本語に訳す場合は、原文 (英語) の文化が尊重される。つまり異化される傾向があるという。これはまさに、Decolonising the curriculum が再考しようとしている西欧中心主義の表れと言えるのではないか。

口頭伝承や民話の翻訳についても、文化の優位性の影響が顕著であると指摘されている (Bandia 2011, Rosa 2015, Sato-Rossberg 2018)。英語だけでなく他言語から欧州言語に翻訳される場合、西洋人にわかりやすいことに焦点が当てられ、元の言語に隠された文化が尊重されない傾向があるという。つまり、翻訳されるものとされないものが優位な言語の翻訳者によって決められる傾向がある、というのである。そして、このようにして原文の言語の特徴や文化が失われてしまうかもしれない⁷。すると、学生が「まっくろけ」と「まっしろ」を色として英訳しないと判断したのは、もしや Decolonising the curriculum が取り組むべき西欧中心主義または自民族中心主義の表れだと考えることもできるのだろうか。

6 今後の課題・展望

この翻訳の授業の実践例を通して改めて考えさせられるのは、脱植民地化は教えることはできないのではないかと、ということである。そもそも Decolonising the curriculum の過程においては、学生と教員は対等な立場にあるはずだろう。言語・文化的背景や立場により、多様性や差別に対する感覚や考え方はひとりひとり異なるため、さまざまな見地を学び、意見を聞き、違いを理解し、共に学び合う姿勢が重要ではないか。そこで、英国の日本語教育における脱植民地化について、今後の教育活動と研究へ向けて、「対話」と「学際的視点」の必要性を提言したい。

6.1 「対話」の必要性

脱植民地化について「教える」ことができないならば、他者を学ぶための対話こそが有益ではないだろうか。

「対話的学び」を推奨している劇作家平田オリザは、対話 (dialogue) は「異なる価値観や背景を持った人との価値観のすりあわせや情報の交換」(平田 2019) を通して学び合い、合意形成を行うことだ、と述べている。先述のとおり、他者と共存するための異文化理解教育としての言語教育の重要性は、マイケル・バイラムをはじめとする研究者によって提唱されている (Byram 1997, 2020)。対話をめぐっては、英国の日本語教育においても、ヨーロッパ日本語教育シンポジウム (2015) や BATJ ドラマプロジェクト (2019～) などにより、言語技術の伝達を超えた言語教育の可能性を探るさまざまな研究や試みが行われている。日本での共生日本語教育も対話的手法を用いた試みの一つであろう。共生日本語教育とは、多文化共生社会の中で学習者の言語・文化的背景を尊重し「同化要請として機能しない日本語教育」(岡崎 2002) のことを指す。これにより、留学生だけでなく移民も含めた多文化社会の実現が期待されている。

こうした点を鑑みると、本授業の中で、日本語教員として学生に学んで欲しい絵本の日本語と日本文化についての言語習得・内容取得項目をもし一方的に説明しただけならば、それは「同化要請」であり言語教育に内在する教員の権力を行使しているとみられる可能性もあるかもしれない。これはまた別の角度から Decolonising the curriculum が取り組むべき、英国の日本語教員の日本中心主義 (Japan-centrism) または自民族中心主義の表れだと考えることもできるのであろうか。これにはさらなる考察が必要である。

今回の翻訳の授業では、教員と学生または学生同士が「他者を学ぶための対話」という視座から、学生の翻訳へのフィードバックとして意見交換を試みた。個別のフィードバックでは翻訳の注釈にもコメントを加えた。教員からのフィードバックは解答ではなく、さらに考察を深めるために他者の視点を提示することではないかと考える。今後はこれを発展させ、ポートフォリオのような形で、何かに気づき、調べ、他の人のものを見方を知り、自分で考え、最善の翻訳方法と訳を選ぶ、という学びの過程を記録するような課題も工夫できるだろう。

6.2 「学際的視点」の必要性

さらに Decolonising the curriculum では、さまざまな分野から多角的に考察することが必要だと考える。例えば、上記の考察では、言語教育、民話、口伝承、児童文学、食べ物や色の文化表象、翻訳学、翻訳と権力、異文化理解の議論などに触れた。世界規模で意識改革が進む脱植民地化の過程において、領域を超えて学際的に学ぶことで、英国の教員自身が、さらには英国の日本語教育が現在どこに位置し、どこへ向かっていくべきなのかを探る手がかりとなるだろう。

本実践ノートを出発点として、英国での日本語教育活動における Decolonising the curriculum について、さらなる議論と研究を進めていきたい。

注

¹ 本稿は第 23 回英国日本語教育学会 (BATJ) 年次大会の実践報告発表とフィードバックをもとに書き直したものである。質問やフィードバックを下された皆様に深く感謝を申し上げたい。

² イースト・アングリア大学研究倫理審査委員会承認番号 SREC 20-038。

³ この部分は、授業中の会話を筆者が和訳し要約したものである。授業は基本的に日本語で行われるが、学生は日英どちらを使ってもよいことにしており、この意見交換は主に英語で行われた。

⁴ Assogba (2012) や絵本ナビ (2012) の投稿で、この絵本の差別的表現が批判されている。

⁵ 岡山県の日常語による『にんじんとごぼうとだいこん』の語りが『日本の昔話』の Web サイト (参考文献参照)

で聴ける。

⁶ 厚生労働省の調査（2015）によると、大根は日本で最も多く食べられている野菜である。また大根は、日本民話で最も多く登場する野菜でもある（平 他（2009））。映画『千と千尋の神隠し』（2001）では「おしら様」（東北地方に伝わる家の守り神）が白い大根の神として描かれている。

⁷ 浅木（2017）によると、民話研究では極端性が昔話の特徴の一つとして挙げられており、極端な色のコントラストもこれに該当するだろう。すると、赤・白・黒の色のコントラストが翻訳で失われることで、昔話の特徴の一つが失われかねないと考えられる。

参考文献

- 浅木尚実（2017）「伝統的言語文化と保育内容「言葉」I —昔話と「聞く力」—」、『秋草学園短期大学紀要』34号, 1-16.
- 絵本ナビ（2012）「よく考えてみて。」、『みんなの声』匿名書き込み。
2022年3月31日 https://www.ehonnabi.net/ehon00_opinion.asp?NVKB=E00&no=826
- 岡崎眸（編）（2002）「内容重視の日本語教育—多言語多文化共生社会における日本語教育の視点から—」, 科学研究費補助金研究成果報告書『内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築』, 322-339.
2022年3月31日 <https://www.dc.ocha.ac.jp/comparative-cultures/jle/Okazaki/naiyoo-juushi.html>
- 厚生労働省（2015）『日本人における野菜摂取量のランキング』
2022年3月31日 <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000096138.html>
- 児玉孝乃（2011）「絵本とは何か—民話・昔話絵本を利用につなげよう」, 『東海学院大学短期大学部紀要』37号, 23-34.
- 平智、川野美保、山崎雪恵、小岩井優、宮沢喜一（2009）「日本民話やグリムおよびアンデルセン童話に登場する果実や野菜をはじめとする食物について」, 『農業および園芸』84巻7号, 715-722.
- 日本の昔話『にんじんとごぼうとだいこん（岡山の昔話）』2022年3月31日
<https://katarinomori13.com/jf/2020/04/11/%E3%81%AB%E3%82%93%E3%81%98%E3%82%93%E3%81%A8%E3%81%94%E3%81%BC%E3%81%86%E3%81%A8%E3%81%A0%E3%81%84%E3%81%93%E3%82%93/>
- 平田オリザ（2015）『対話のレッスン - 日本人のためのコミュニケーション術』, 講談社学術文庫。
- 平田オリザ（2019）「他者への寛容を学ぶために。「対話的な学び」に必要なもの」, 『ミモレ』
2022年3月31日 <https://mi-mollet.com/articles/-/18158?layout=b>
- 松谷みよ子（1989）『にんじんさんがあかいわけ』, 童心社。
- ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（2015）『日本語教育における対話について考える』, ヨーロッパ日本語教師会・フランス日本語教師会共催（第19回第ヨーロッパ日本語教育シンポジウム・15回フランス日本語教育シンポジウム）。
- Assogba, J. (2012) Ban Matsutani Miyoko's racist picture book, *change.org*. Retrieved March 31, 2022, from <https://www.change.org/p/ban-matsutani-miyoko-s-racist-picture-book>
- Bandia, P. F. (2011) Orality and translation. In Y. Gambier, & L. van Doorslaer (Eds.), *Handbook of Translation Studies: Volume 2*, 108-112. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Bandia, P. F. (2015) Introduction: Orality and translation. *Translation Studies*, 8 (2), 125-127.
- Bassnett, S. & Trivedi, H. (Eds.) (1998) *Post-Colonial Translation: Theory and practice*. London: Routledge.
- Bhambra, G. K. et al. (Eds.) (2018) *Decolonising the University*. London: Pluto Press.
- Byram, M. (2020) *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence: Revisited*. (1st ed., 1997) Bristol: Multilingual Matters.
- Hack, K. (2020) Decolonisation of the curriculum – a conversation, *AdvanceHE*. Retrieved March 31, 2022, from <https://www.advance-he.ac.uk/news-and-views/decolonisation-curriculum-conversation>
- Institute of Modern Languages Research (IMLR) (2020) Decolonising Modern Languages: A symposium for sharing practices and ideas. Retrieved March 31, 2022, from <https://modernlanguages.sas.ac.uk/events/event/22797>

- Liddicoat, A. J. & Scarino, A (2013) *Intercultural Language Teaching and Learning*. Chichester, West Sussex, UK; Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- Lin, A. M. Y. & Martin, P. W. (Eds.) (2005) *Decolonisation, Globalisation: Language-in-education policy and practice*. Clevedon, Buffalo, and Toronto: Multilingual Matters.
- Macedo, D. (Ed.) (2019) *Decolonizing Foreign Language Education: The misteaching of English and other colonial languages*. New York and London: Routledge.
- Marinetti, C. (2011) Cultural approaches. In Y. Gambier & L. van Doorslaer (Eds.), *Handbook of Translation Studies: Volume 2*, 26-30. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Munday, J., Pinto, S. R. & Blakesley, J. (2022) *Introducing Translation Studies: Theories and applications*. 5th edition. London and New York: Routledge.
- Phipps, A. (2019) *Decolonising Multilingualism: Struggles to decreate*. Bristol: Multilingual Matters.
- Phipps, A. (2021) Decolonising the languages curriculum: linguistic justice for linguistic ecologies. In T. Beaven & F. Rosell-Aguilar (Eds.), *Innovative Language Pedagogy Report*, 5-10. Retrieved March 31, 2022, from <https://research-publishing.net/manuscript?10.14705/rpnet.2021.50.1228>
- Rosa, A. A. (2015) Translating orality, recreating otherness. *Translation Studies*, 8 (2), 209-225.
- Sato-Rossberg, N. (2018) Translation in oral societies and cultures. In S. Harding & O. C. Cortés (Eds.), *The Routledge Handbook of Translation and Culture*, 314-26. New York and Abingdon: Routledge.
- Venuti, L. (2008) *The Translator's Invisibility: A history of translation*. 2nd ed. London and New York: Routledge.